

偽装夫婦のほすが、  
スパダリ契約夫に毎晩翻弄されています

——また来た……

【やっぱりやり直さないか？ 俺が好きなのはお前だけなんだ】

元カレから送られてきたメッセージに【無理です】と返信してスマホを置いた。

ため息をつきながら、つくづく私の気持ちなんかお構いなしなんだな、と独りごちる。

——付き合っているときはなんでもかんでも上からでオレ様。それにうんざりして私が別れを切り出したときはあっさりOKしたくせに、いざ別れたらこれよ。人を舐めるのもいい加減にしてほしいわ。

『俺と別れたら後悔するからな!? あとで泣きついても知らねーぞ!!』

と言っていたくせに、やっぱりやり直したいと縋ってきているのは向こうではないか。

イラつくけど、気の迷いとはいえ一時的にあの男を恋人にしまった自分にも非はある。これも人生勉強の一つだと思っしかない。

そう自分に言い聞かせている私——阿木<sup>あきじん</sup><sup>な</sup> 絢奈、二十八歳。照明器具メーカーの総務課に勤務する会社員である。

自社ビルの一階がショールーム、二階から上の階が本社となっているこの会社に新卒で入社し、六年目。学生のときからインテリアが好きで、念願叶って入社した会社ということもあり、仕事に関しての不満は一切ない。同僚との関係も良好で、充実した毎日を送っている。

しかし今は昼休みに入ってすぐ元カレからのメッセージを見てしまったので、あまり気分はよろしくない。

財布の入った小さなバッグを手に席を立つと、ちょうど外から部署に戻ってきた同僚の岩瀬さんと鉢合わせした。

「阿木さんお疲れです。お昼ですか？」

「うん、ちよつと外に出てくる。岩瀬さんは……あ、買ってきたんだ？」

一つ年下の彼女とはよく食事にも飲みにも行く間柄。お昼に誘おうかと思っただけ、彼女の手にはお弁当らしきものが入ったビニール袋があった。

「そうなんです、外に出たついでに買ってきちゃいました」

「そっか。じゃあ、今度一緒にランチしようね」

岩瀬さんと別れ、社屋を出た私がつつと向かう先はいつもほぼ同じ。会社から徒歩三分くらいの場所にある蕎麦屋だ。

「こんにちは」

暖簾をくぐり引き戸を開けると、蕎麦つゆのいい香りが漂ってくる。

ちよくちよく顔を出す私の姿を見た瞬間、女性店員さんの顔がほころんだ。

「いらっしゃいませ！ お好きな席にどうぞ」

テーブル席や小上がりもある店内で、私が選ぶのはいつもカウンター席。まだすべての席が空いているカウンターの端っこに腰を下ろし、メニューに目を通すことなく調理場の店員さんに声を掛けた。

「天ざるをお願いします」

「はい、お待ちください」

よほど混雑している場合や連れがいるときを除き、お弁当を持ってこなかった日のお昼はここと決めている。

理由は会社から近くて料理が出てくるまでの時間が早いのと、少し甘めの蕎麦つゆが私好みだから。あと、店主さんと店員さんの感じがいい。

カウンターでスマホをいじって時間を潰していると、店の戸が開いてお客さんが入ってきた。昼どきなのでお客さんが来るのはいつものこと。とくに気に留めることなくスマホに視線を落としていると、そのお客さんもカウンター席に腰を下ろした。

「天ざるください」

聞き慣れた声を耳にし、スマホから顔を上げ横を見ると、いつもこの店で遭遇する男性客がいた。——お。また会った。

しかも今日はオーダーが私と一緒に。「気が合うな」と心の中で思い、少し顔が緩んだ。

私がなぜこの男性客のことを覚えているかというところ、やたら顔がいいから。いつもチラ見する程

度だけど、鼻筋がスツとしていて横顔が美しい。上背もありスーツが様になっていて、目の保養にびったりだ。

この辺はビジネス街なので、どこかの会社に勤務するサラリーマンなのだろう。私同様、いつも一人で同じ時間に蕎麦を食べに来ている彼に、勝手に親近感を覚えてしまっているのである。

——かといって話しかける勇氣はないけど。

多分向こうだって一人でゆっくり蕎麦を楽しみたいはず。そう思うと、一メートルちよつと先に座っている男性に話しかけようという気にはならない。

私のところに先に天ざるが来たので、無言で淡々と食べ終えて、早々と店を出た。会社まであと少しというところで、ポケットの中のスマホが震えた。画面を確認すると、またしても元カレからメッセージが届いているようだった。せつかくおいしい蕎麦とイケメンに心癒されたばかりだというのに、どうしたって気分が沈んでいく。

本当は、元カレからのメッセージをブロックしてしまいたい。でも以前、同じように元カレがストーカー化した友人から、ブロックは相手の感情を逆撫でし、激高げきこうさせる可能性があるのやめたほうがいいと言われた。だから今はうんざりしつつも、なんとか堪こたえてブロックせず放置している。そのうち諦めてくれたらいいんだけど。だって、再構築なんて絶対にありえないから。

はあ……と重苦しいため息をついているうちに、昼休み終了まであと二十分ほどになったので、私は会社に戻ることにしたのだった。

総務課では福利厚生に関することなどを中心に仕事をしている。その他にも電話対応や、来客対応なども総務の仕事ではあるが、定時を過ぎて働くことは滅多にない。

今日も定時通りに仕事を終え、まっすぐ帰宅する。私が住むのは築十五年ほどの賃貸アパートだ。部屋に入って、帰り道にあるスーパーで買ってきた食材を冷蔵庫に入れ終えてから、連絡があるかを確認するためにバッグからスマホを取り出した。

——よかった、なにも来てない。

そのことに安堵した私は着替えをして、クッションの上に腰を下ろした。

元カレと別れたのは二年くらい前。

優しくてマメな彼に惹かれて付き合い出したのに、それから間もなくして彼はモラハラ男に変貌した。

『だからお前はダメなんだ』

『俺はこれ嫌いだって言ったよね。なんでわざわざ俺が嫌いなものを作るの？』

『全然ダメじゃん。お前、やる気あんの？』

会うたびにこうした言葉を浴びせられ、私の精神はみるみる疲弊していった。

好きという気持ちもいつの間にかなくなり、彼と一緒にいることが苦痛になって、付き合い始めて半年くらいで別れを切り出したと思う。

『俺みたいな男を捨てるなんて、お前は本当に見る目がない。絶対今後、幸せになんかなれないか

らな』

別れたいという私に嘔みついてきたあの男は、散々罵倒した挙げ句、捨て台詞を吐いて去っていった。

もう最後のほうは馬の耳に念仏というか、なるべく彼の言葉が頭に残らないよう聞き流していた。それにどちらかという別れられることが嬉しすぎて、彼の呪いの言葉なんかまったく気にならなかった。いわば無敵状態だった。

しかし、二年後。その彼が復縁したいと連絡してきたときは、地獄の再来かと思ちゃくちや凹んだ。

どういう心境の変化なのか、事情は一応聞いている。私のあとに付き合った女性が何人かいたものの、誰とも続かなくて短期間で別れてしまったらしい。そんなときに私のことを思い出し、やっぱりあいつかいがない……となったようだ。

——いや、私も短期間で別れてるんですけど……

他の人とはどれだけ短かったんだ、と喉まで出かかったけど、それはグツと堪えて申し出を断った。しかし何度断っても相手は懲りずにメッセージを送ってきたり、何度も電話を掛けてきたり……という状況が続いている。

しつこいメッセージと電話には悩まされているものの、今のところ幸い、それ以外の困り事は起きていない。ただ、元カレはこの家に遊びに来たことがあるし、会社も知られている。だから、そのうち押しかけて来るのではないかと、若干ビクビクしながら毎日を過ごしている。

買ってきた野菜を炒め、冷凍しておいたご飯を温める。そこに缶ビールをプラスしたら、私のささやかな夕飯タイムだ。

——一度別れてるんだから、よほどのことがないと上手くなんかいかないと思うんだけどな……  
なんでそう思わないのかなあ……

グビツとビールを呷ってからため息をつく。

一度ダメになった私なんかより、もっといい女性がきつといるはず。過去に執着などせず未来に進んだ方が本人にとってもいいと思うのに。

かくいう私も、元カレと別れてから出会いがなくて新しい恋ができない。

——職場は女性が多いし、数少ない男性はほぼ既婚者か彼女持ちだしね……

他に出会いの場ってないものかな、などと考えるも、自分から積極的に行動を起こすほど恋人がほしいわけでもなくて、結局状況は変わらないのであった。

数日後。

また昼にいつものあの蕎麦屋に行くと、今日は珍しく混雑していて、カウンター以外の席はすべて埋まっていた。

——今日は混んでるなあ……

空いていたカウンター席に腰を下ろし、店員さんに声を掛ける。どうやら今日は団体のお客さんが入った関係で、この混雑ぶりなのだという。

とはいえ、私としてはカウンターさえ空いていれば問題ない。注文を終え、そば茶を飲みながらまったりしていたときだった。

「隣、いいですか？」

声を掛けられた方へ顔を向けると、そこにいたのはいつも昼どきにここで遭遇するあのイケメンだった。

「あ、はい。どうぞ」

相手が声を掛けてきたことに驚きはしたものの、今日の混雑ぶりを思えば納得だった。他に空いている席がないのだから。

店員さんが来て、男性の前にお茶とおしぼりを置いていく。男性はメニューを見ることなくすぐにオーダーをした。

「ざる大盛りで」

男性のオーダーは嫌でも耳に入ってくる。その瞬間、私はうっかり男性を見てしまった。視線に気づいた男性が不思議そうな顔をする。

「……なにか？」

「あつ、すみません。いえ、私とオーダー一緒だなんて思ってた……私は普通盛りですけど」

「ざるですか。今日は店が混み合っているので、天ぷらを揚げる手間を掛けさせるのが申し訳なくって、つい」

理由が一緒にクスツとしてしまう。

「同じです。私もその理由で今日はざるにしました」

私と視線を合わせていた男性の口元が、少し緩んだ。

「……よく会いますよね、ここで」

相手が私の存在に気がついていて、その事実、心の中で「おっ？」と声を上げた。

「そうですね。よくご一緒するなーって思っていました」

「職場が近いんですか？」

意外にも相手のほうから話を広げてくれた。

「はい、徒歩三分くらいなので」

へえ、と男性がそば茶の湯呑みを手に、小さく頷いた。

「社員食堂とかないんですか？」

「ないんですよ。契約しているお弁当業者さんはいるんですけど、少し飽きちゃって」

うちの社員の大半はそのお弁当を注文している。けれど味付けが濃く、食べ続けているうちに飽きてしまい、注文するのをやめてしまった。それからずっとお昼は自作の弁当か、この店の蕎麦など外食で済ませている。

「そうでしたか。私はそういった理由ではないのですが、昼はなんとなく仕事から離れたくて。それでふらりとここへ」

「あー、わかります。職場の人がいないところへ行きたいときってありますよね」

本当にそういうときってある。部署内の雰囲気が悪いときとか、ちよつと嫌なことがあったとき

などは、外の空気が吸いたくなる。

わかりすぎて即同意したら、男性がクスツと笑った。

「わかっていただけで嬉しいです。……あ、自己紹介がまだでしたね」

男性は脱いだジャケットのポケットからレザーの名刺入れを取り出し、そこから抜き取った一枚を私に差し出す。

「申し遅れました、（巨理）巨理と申します」

「ご丁寧ありがとうございます。では、私も……」

いただいた名刺をカウンターに置き、私も慌てて財布から自分の名刺を取り出した。

「阿木と申します」

「ありがとうございます。あき……さんですか」

お互いに相手の名刺に視線を落とす。

イケメン男性の名前は巨理倫（と）倫（と）というらしい。そして名刺に記載されている会社名に驚く。そこは私の勤務先のはず向かいにある、食品や飲料を扱うメーカーとしては国内有数の大企業だった。

しかし、驚きはそれだけではない。巨理さんの肩書きが「専務取締役」とあって、思わず二度見してしまった。

「えっ……。専務!? こちらの会社で専務をなさっているんですか!？」

声を精一杯潜めながらも、その事実には衝撃を受ける私に、「巨理さんが真顔で頷く。

「ええ、そうなんですよ」

「お若そうに見えますけど……」

「三十です」

——若いじゃない!! 私と二つしか変わらないんだけど!!

激しく突っ込みを入れたいところだけど、さすがにできない。グツと堪えて黙っていると、そば茶を啜っていた巨理さんが静かに口を開く。

「世襲なんです。一応、現社長の長男でして。たいしたことはありません」

私にとってはたいしたことなんですけど……と言いたるところだが、多分あまり突っ込まれたくないだろうから、黙る。

新事実がいろいろ発覚して落ち着かない中、私の前にお蕎麦が運ばれてきた。

「じゃ、お先にいただきます」

一応巨理さんに声がけしてから食べ始める。「どうぞ」と言ってくれた巨理さんの前にも、すぐに大盛りのざる蕎麦が置かれた。

「いただきます」

箸（はし）を手を取った巨理さんの前にある蕎麦の量に、目が釘付けになる。

「すごい量ですね……。私、この店で大盛りって頼んだことないです」

「女性にはきついかもしれないですね、この量は。私も毎回注文するわけではないんですが、これくらい食べておかないと夜まで保たなくて」

確かにそうかも。

私も今日は致し方なくざる蕎麦のみだけど、これだけで夜まで保つかと言われたら、結構厳しい。多分三時の休憩でちよつとお菓子をつままない夕方お腹が空きそうだ。

私は休憩のときになにかしら食べられるけど、亘理さんみたいに忙しそうなのはきつとそういうわけにもいかないのだろう。

なんてことを考えながらずると蕎麦をすすする。その間、私も亘理さんも言葉を発さず、黙々と食べ進めた。

——一気に食べちゃった……

無言で食べているうちに蕎麦を全部食べ終えた。お新香も全部綺麗に食べ終えて、ご馳走様でしたと手を合わせる。

何気なく隣を見ると、亘理さんのざる蕎麦も残り少しになっていた。私の蕎麦の倍くらいあった気がするのに。思わず目が丸くなる。

「速っ!! 食べるの速すぎませんか？」

「そうですね……? でも黙って食べていたらこんなものかと」

言われてみれば私も食べるのが速いわけじゃないし、そういうものか、とすぐに納得した。

私がスマホをチェックしてから財布を出していると、亘理さんも完全に食べ終わったようだ。

「じゃあ私、先に出ますね」

そう言って会計に行こうとしたら、なぜか手に持っていた伝票を亘理さんに奪われてしまった。

「なんで?」と疑問が頭の中を駆け巡る。

「へ? あの……」

「初めてお話した記念に今日は私をご馳走しますよ」

「そんな、申し訳ないです」

本当に申し訳ないと思っているのに、亘理さんは伝票を持ってレジ前に移動してしまった。

「お気になさらず。それより、またここで会ったときは声を掛けてくださると嬉しいですよ」

「そ……それはもちろん、いくらでも」

「ありがとうございます。では、今回は払わせてくださいいね」

結局亘理さんの押しに負け、ご馳走になってしまった。

申し訳ないと思いつつ、店を出てから再度お礼を言う。

「本当にご馳走さまでした」

「いえいえ。なんというか、蕎麦仲間ができたみたいで嬉しかったので」

「あはは……」

こんなすごい人に仲間と言われて、なんだかこそばゆい。

ついでに会社の方向が同じだったので、途中まで一緒に帰る流れになったのもこそばゆい。

それにしても、亘理さんは背が高く足が長い。並んで歩くとそれがよくわかる。

——私より二十センチは高いよね……。百八十はありそう……

イケメンで長身、それでいて社長の息子とか。モテる要素だらけだ。

なんて思いながら、いい天気ですねーとか、午後はお腹いっぱいだと眠くなりますよね、なんて

当たり前障りのない会話をしていた。

巨理さんもそれに同意するように「大事な会議のときに眠くなったら地獄ですからね」とか「なにかやらかしたらすぐに社内でも噂が広まるんですよ」など、話に乗っかってくれた。

——全然偉ぶってなくて、いい専務さんだな。

うちの専務は創業家出身でもないのに、めちゃくちゃ偉ぶって社員から嫌われている。若くてかつよくて、おまけに謙虚な巨理さんが専務だなんて、正直うらやましい。

社員さんたちも自慢に思ってるんじゃないかな……と考えていると、蕎麦屋が会社から近いこともあって、あつという間に巨理さんとお別れのときがやってきた。

私は今いる道沿いの、巨理さんは信号を渡って向こう側にあるビルが勤務先だ。

「じゃ、ここで……」

私は立ち止まり、信号を渡ろうとする巨理さんを見送る。

そんな私と私の勤務先のビルを交互に見ていた巨理さんが、真顔で口を開く。

「一つ向こうの横断歩道にします。会社までお送りさせていただきます」

「ええっ!? いや、大丈夫です!! もうじきお昼休みが終わるので、外で昼食を済ませた他の社員も戻ってきそうですし……」

これに巨理さんが眉尻を下げた。

「……他の方に見られると、なにか不都合でも?」

しまった。これじゃ巨理さんと一緒にいるのを見られたら困る、みたいな言い方だ。

「いえ、違うんです。その……巨理さんみたいな素敵な男性と一緒にいると、すぐどういう関係か探ってくる人がいるんです。とくに一階のショールームから外が丸見えなので……」

一階ショールームにはお局様がいて、そういう事柄に敏感なのだ。これまでも、あらぬ噂を広められてしまった同僚が何人もいる。

「それは……恋人に誤解されるとまずい、ということですか?」

「ん? いえ、恋人はいないのでそこは問題ないんです。そうではなく、むしろ巨理さんにご迷惑をおかけしてしまいそうなので」

なぜか恋人がいないことを自ら暴露する流れになってしまったが仕方ない。それより、私ともども巨理さんをお局の餌食にするわけにはいかない。

「なるほど。であれば、そういったお気遣いは不要です。私も恋人はいませんので」

——意外。いないんだ。

「そ、そうですか? でも、次の信号だと遠回りになってしまいますし、やっぱり私はここで失礼します」

「了解です。では、また」

再度会釈をして巨理さんと別れた。

普通に生活していたら、まず知り合うこともないような巨理さんと一緒に食事ができて、なかなかいい時間だった。

——またご一緒できたらいいな。

そんな淡い期待を抱きながら、小走りで会社に戻った。

それから数日後の金曜の昼。

——はあ……もう、本当にやだ……

普段と比べて格段に今日の私はブルーだ。というのも、昨日帰宅したあとにドアホンのモニター履歴を見たら、まさかの元カレが映っていたからだ。

時刻を見れば、夜の七時前。普段なら間違いなく帰宅している時間だが、昨日はたまたま帰り道で通りかかった洋食屋にふらりと立ち寄り、食事をした。さらにその後、近くにあったコーヒースタンドでのんびりしてから帰ったので、帰宅したのは夜九時過ぎだった。

おかげで元カレには会わずに済んだのだが、よくよく履歴を確認してみるとヤツは夜七時過ぎから八時近くまで粘っていたことがわかり、ゾツとした。

絶対、元カレに会いたくない。今すぐにでも引越したいくらいに。

——でも、先月同僚の結婚式で結構お金が飛んだんだよね……。二ヶ月連続で予定外の出費、痛いわ……

ご祝儀から洋服代に美容院代。靴もこの際だからとちよつといいものに買い換えたばかり。そして今度は引越し……となるとお金もかかるし、その前に物件も探さなくてはならない。

「最悪……」

昼休みなのに、考えなければいけないことが山積みで頭が痛い。でもお腹は空くということ、

ふらふらしながら蕎麦屋に行くと、カウンター席に亘理さんが座っていた。

「亘理さん、こんにちは」

背後から近付いて声を掛けたら、彼が表情を緩める。

「こんにちは。どうぞ」

横の椅子を手で示されたので、素直にそこへ腰を下ろした。

注文を終えてそば茶を飲んでみると、すでにオーダーを済ませた亘理さんも湯呑みを口につける。

「阿木さんはこの店、夜に来たことはありませんか？」

「え？ 夜ですか？ ないです」

唐突な質問に、亘理さんのほうへ顔を向ける。

「実はここ、夜になると通常メニューの他に居酒屋メニューが増えるんですよ。知っていましたか？」

「居酒屋メニュー……ですか。いえ、まったく知りませんでした」

この店があるのは、私が通勤で利用している駅とは反対の方向。よって、帰りに店の前を通るとはなない。

「昼は出していないお酒と、酒に合うつまみを出してくれるんです。茄子の揚げ浸しとか、モツ煮込みとか」

「つてことは亘理さん、夜もこの店に来たことがあるんですね」

「少し前に。知り合いと仕事帰りに寄ったんですけど、よかったですよ」

——へえ、夜は蕎麦居酒屋になるのか……。いいなあ、興味ある。

想像が膨らんで、今度一人で行こうかな、とか、会社から近いなら仲のいい同僚を誘ってもいいかな、などと考えていたときだった。

「もし阿木さんさえよければ、今夜どうですか？」

誘われるとはまったく予想していなかったので、えっ!? と小さく声を上げてしまった。

「わ、私……ですか!？」

「はい」

「いやあの……、嬉しいですけど、なんでですか……?」

まだ会話するようになって二回目の私をわざわざ飲みを誘ってくるなんて、なにか裏があるのではと思わずにはいられない。

訝しげな視線を巨理さんに送ると、彼はため息交じりに教えてくれた。

「実はちよつと頼み事がありました」

「頼み事……? 巨理さんが、私に?」

そう、と彼が頷く。

全然わからない。一体なにをお願いされるんだろう。

「仕事のことですか? でも、私みたいなただの社員ではなにも……」

「いや、仕事は関係ないんです。あくまでもプライベートなお願いで」

——ますますわからないんですが……

心の中で首を限界まで傾げるけど、こうなつてくると逆にどんなお願いをされるのか気になつて

きた。

「……それ、今ここで聞かせていただくわけにはいきませんか?」

これに巨理さんが「んー」と渋い顔をした。

「昼休みですし、あまり時間ありませんよね? できれば時間を気にせずゆっくり話したいのですが。どうでしょうか?」

巨理さんが本気で困っているように見えて、なんとなく胸がくすぐられる。

ハイスペックで悩み事なんてなさそうなこの人が、あえて私に頼みたいことがある。そんなことを切実そうに切り出されたら、断つてはいけないような気がしてしまう。

「わかりました。では、夕方何時頃ここに来ればいいですか?」

私が頷くと、巨理さんの顔に笑みが浮かんだ。

「ありがとうございます、では、夕方六時にここで。予約を入れておきますので」

「わ、わかりました……」

承諾してから、本当によかったのだろうか……という考えが頭をよぎった。でも、巨理さんから嫌な感じはしないし、大企業の専務を務めている人が私を騙したり、バレたらまずいようなことをするとは考えにくい。

——まあ、きつと大丈夫でしょ……。頼み事って言ったって、うちのショールームで働いている女性を紹介してほしいとか、そんなところかな……

男性が個人的に女性にするようお願い事など、それくらいしか思い浮かばない。お金はどう見たって

向こうのほうを持つていそうだし。

そうこうしているうちに巨理さんの前にはざる蕎麦の大盛り、私の前には山菜蕎麦が運ばれてきた。

「じゃ、食べましょうか」

「で、すね……。いただきます」

二人ともずるずると蕎麦を啜り始め、お互い食べ終わるまでなにも言葉を発しなかった。

蕎麦を綺麗に食べ終えたところで、巨理さんがさっと席を立ち、今夜の予約をしていた。そのついでに彼はまたしても私の分まで代金を支払っていて、さすがに二回連続で奢おごってもらうのは気が引けて、私は財布を出した。

それに対し、巨理さんは困り顔になっていた。

「いいのに、これくらい。私のわがままで今夜も来てもらうんですし」

「いえ、そういうわけには」

無理矢理ぐいぐいとお金を渡したら、彼は観念した様子で受け取ってくれた。

「では、夜は私の奢りで。いいですね？」

「それは……」

「これは決定事項です」

店を出て、会社までの道を二人で並んで歩く。

「頼み事のヒント、なにかもらえませんか？ 気になるんですが」

「ヒント？ ……うーん……そうですね……極めてプライベートなことです」

——極めてプライベート？ ってことはやっぱりショールームの女性を紹介してくれる的なやつかな……？

「……巨理さん、会社内で出会いとかないんですか？」

「へ」

珍しく巨理さんが間の抜けた声を出す。

的外れだったのかもしれない、と慌てて口を開く。

「あっ、いや。その……女性を紹介してほしいとか、そういうことかなって思っ……」

「違います」

きつぱり否定されてしまった。

「ええ……。じゃあ、なんだかわかんないな……。でも、私じゃないとダメなことなんですよね？」

「そうですね。阿木さんにぜひお願いしたいことです」

「やっぱりわからない……。もういいです、夜まで我慢します」

「すみません、お手数かけます」

クスクス笑っている巨理さんに、心の中で猛突っ込みを入れる。

——ちょっとくらい教えてくれてもいいのに！ 夕方までこのモヤモヤを抱えたまま仕事しないといけないの……きつ……

でも我慢するしかないんだけど。

お別れポイントに到達したので、丁寧に頭を下げた。

「では、また夜に」

「はい。もしかしたら私、遅れるかもしれないので。そのときは店の人に亘理ですと伝えてください」

「わかりました」

結局なんだかわからないまま、亘理さんと別れて会社に戻った。

有名企業に勤務するイケメンに誘われたら、普通の女子は浮かれると思う。

しかし、シヨールームのお局からの理不尽なクレームにより、今の私はそれどころではなかった。事の始まりは、お局のお得意様が注文した商品を取りに来店したことだった。というのも弊社のシヨールームは基本的に体験、展示が主。展示してあるものを購入したい場合は事前注文が必要で、即売は行っていない。

お得意様なので、その辺りはもちろん把握済み。事前に注文の電話をし、取り寄せに必要な期間を確認した上で来店してくださった。

しかし、今日になってお局のミスが発覚。なんと電話をもらったこと自体すっかり失念し、発注を忘れていたらしいのだ。

お得意様の来店に泡を食ったお局だったが、そこはさすがベテラン。平謝りでどうにか納品日をずらしてもらったらしいが、お客様が帰られたあと、総務に飛び込んできた。

「ちよつと阿木さん!! 総務に発注伝票紛れてない!？」

「へ……? いや、基本的に発注伝票はこっちに回ってきませんし……。データには入ってないんですか?」

「ないのよ!! でも私が忘れるなんてことありえないんだけど!!」

どうやらお局は自分の失敗を認めたくないようだが、そんなことはない。過去にも何度かやらかしているのをこのフロアにいる人は皆知っている。

「とにかく……! 見つかつたら連絡ちょうだい」

明らかに気が立っているお局がフロアからいなくなつた途端、部署の皆がはあ……と息を吐いた。「まったく……。いつもすぐには自分の非を認めないんだから……」

ぶつぶつと課長が呟いたのが耳に入った。お局は勤続年数二十五年近くのベテラン。勤続年数だけなら、役員や課長以上の役職付き社員に匹敵するほどの古株だ。

課長や部長と入社時期があまり変わらないということもあり、彼らと対等に渡り合えると本人は思い込んでいるらしく、そこがとても面倒くさい。

なにかあれば部長に言いつける、お前なんかとばしてやる……などの暴言を吐くので社員から嫌われているのだ。

——ああもう……。せつかく亘理さんとの約束でいい気分になつてたのに……このあと再びお局に「伝票ありませんでした」と報告しなければいけないのが地味に苦痛で、

うっかり巨理さんとの約束を忘れそうになった私なのだった。

——あー、面倒くさかった……。案の定、お局めっちゃ機嫌悪かったな……

終業間にシヨールームへ行き、お局に伝票はなかったと報告した。そのときの鬼の形相キョウシヨウは今思  
い出しても背中がひんやりする。

『本当なの!? ちゃんと探した!?』

探しました……と項垂くろみだれ、精一杯やりました感を出しつつ報告すると、鼻息荒いお局がチツ、と  
舌打ちした。

『絶対私が忘れるはずなのに……。まあいいわ、商品なんか確保できそうだから』

確保できるならいいじゃない、なぜ私に当たるの……と理不尽な思いをしつつ、お局から逃げる  
ことに成功した。

やれやれ、と肩の力を落としながらだんの蕎麦屋へ向かう。

夜の蕎麦屋も外から見るとは昼となにも変わらない。もちろんそれは、引き戸を開けても同じ  
だった。

「いらつしやいませ、一名様ですかー?」

昼とは違う店員さんに予約した巨理ですと伝えたら、奥の小上がり席に通された。

——おお、小上がり席初めてだわ……

ずっとカウンターだったので初的小上がり席にドキドキする。小上がり席には木製の衝立が置か

れているので、半個室状態だ。

端っこの席は密会にびったりね……と思いつつ、運ばれてきたそば茶を啜る。まだ巨理さんは  
来ていないので、夜の居酒屋メニューを眺めながらのんびり待つことにした。

蕎麦もいけど、せつかくの夜メニューだし、ここはお酒を楽しむべきか。悩んでいると、店の  
引き戸が開く音が聞こえ、巨理さんが姿を現した。

「すみません、お待たせしました」

待ったとはいえ、まだ待ち合わせ時間から十分も経っていない。

「大して待っていないんで大丈夫ですよ。それよりも巨理さん、この時間だと忙しかったんじゃない  
いですか?」

小上がりに上がってジャケットを脱いでいる巨理さんに声を掛ける。よく見ると、昼はバツチリ  
決まっていた前髪が少し乱れている。

急いで来てくれたんじゃないかなあと申し訳なくなっていると、いや、と彼が首を横に振る。

「会議さえ入らなければいつもこれくらいですよ。それより仕事帰りで疲れているのに来てくだ  
さってありがとうございます」

「いえいえ、結構楽しみにしてたんですよ。巨理さん、お酒飲みます?」

「酒……はどうしましょうね。話の内容が内容なので、飲んだ方が話しやすいかもしれません」  
ややトーンを落とした声で彼が呟いた今の一言を、私は聞き逃さなかった。

——内容が内容だけに……!? しらふだと話せないようなことって、なに……!?

ますます話の内容が気になって仕方がない。

料理の注文をすつとぼしてさつさと本題に入ってもらいたいけど、そこはグツと我慢する。

結局私も巨理さんも、まずビールで乾杯することにした。

居酒屋メニューからは揚げ出し豆腐やがんもどきの煮付け、豚のもつ煮とそばがきを注文した。そばがきは昼のメニューにはないので、見つけたときは心が躍った。蕎麦好きにはたまらない。まずビールが運ばれてきたので、周りのご迷惑にならないよう小さく乾杯した。

——目の前にイケメンがいると、普通のビールも心なしか美味おいしく感じるわ……

ジョッキを置き、さて、と巨理さんに向き直る。

「それで、頼み事とは一体なんでしょうか」

さつさと本題に入ろうとする私に、巨理さんが苦笑する。

「まだビール一口しか飲んでないんですが、……でもまあ、あんな言い方されたら気になりますよね」

「ですよ。めちやくちや気になります」

巨理さんがビールジョッキを置き、はあ、と一息つく。それからまっすぐ私を見つめてきた。

「まだ会って数回の阿木さんをお願いするようなことでもないんですが」

「はい？」

「阿木さん、恋人はいらっしゃらないんですよね？」

急な質問に目が丸くなる。

「……いませんけど」

「先日の別れ際にその話を伺って、閃いたんです」

「だからなにをです？」

「単刀直入に言います。阿木さん、私と結婚してくれませんか？」

……………

耳が彼の言葉を誤変換したのかと思った。

「ん？ あの……。今、結婚って言いました……？」

「言いました」

自信たっぷり巨理さんが頷く。

その様子を見て、ようやく言われた内容が頭に入ってきた。

「は!？」

まあまあ大きな声を出してしまい、慌てて声のボリュームを下げた。

そんな私を見て、巨理さんが笑っている。

「すみません、驚かせてしまって」

「そりゃ驚きますよ!! なんで私!? てっきり蕎麦友だと思ってたのに……」

「蕎麦友はそのままでもいいんですけど、これにはちゃんと理由があるんです」

おちゃらける様子が一切ない巨理さんの姿に、だんだん頭が冷静になってくる。

「理由って……なんですか？ 一体どんな……」

巨理さんが申し訳なきように微笑んだ。

「実は、私には世間では資産家と言われている祖父がおりまして。今私が勤めている会社の先代社長であり、現会長という立場なのですが」

「はあ」

力なく返事をする。

「この前親族の集まりがあったときに、祖父から先日行われた健康診断の結果が思わしくなかったと報告があったんです。祖父も高齢ですし、この先いつどうなるかわからない。そこで、今祖父が所有している財産を生前贈与したいと言い出しまして」

「……生前贈与、ですか……」

庶民生まれ庶民育ちの私には縁遠い話だな、と思いながら話の続きを待つ。

「その生前贈与の条件というのが、既婚の孫に限る、というものだったんです」

「……へっ。結婚してるお孫さんじゃないとダメなんですか？ それ以外のお孫さんには相続する権利が与えられない、ってことですか？」

巨理さんが頷く。

「その通りです。ですから、相続の権利を得るためにあなたに結婚をお願いしたのです。もちろん、これは契約上の結婚で、相続の手続きもろもろが完了するまでなので……婚姻期間はおそらく一年半から二年ほどでしょうか」

「いや、ちょっと待ってください!! 無理ですよ、そんなの……」

理由はわかったけど、私に契約結婚なんかできる自信もない。

それに結婚するならやはり恋愛がいい。

となると、この話を受けるわけにはいかない。

ごめんなさい、と頭を下げようとしたとき、巨理さんがぼつりと呟いた。

「……少々事情があり、他の孫がすべての財産を得るのを黙って見過ごすわけにはいなくて」

巨理さんの表情に陰りが見える。

その様子が気になって、私は頭の中で巨理さんの事情とやらの想像を巡らせた。

「あの、それって例えば、他のお孫さんの中に問題ありな人がいる……とかですか？ ありがちですけど」

私の予想が的中したのか、巨理さんが苦笑している。

「お恥ずかしながらその通りなんですよね。実は、もう一人の孫である私の従兄いとこがかなりの放蕩息子でして。定職に就くこともなく親の資産を食い潰しながら生活している状況で……。その従兄は既婚者なのですが、財産が手に入ったら祖父の家や土地をすべて売却するつもりのようなんです」

「えっ……。確かに従兄さんなら条件はクリアされてますけど、まだ相続するって決まったわけじゃないですよね？ なのにそんなことを巨理さんに言ってきたんですか……?」

いえ、と巨理さんが首を横に振る。

「従兄が父である叔父にそう豪語していたようで、困り果てた叔父から内密に話が回ってきたんです。叔父も自分の息子とはいえ従兄には手を焼いていましたね」

「そうですか……あの、でも。従兄さんじゃなくてお祖父様のほうをどうにかするというのは……」  
「私もそう思つて、叔父と二人で祖父の説得を試みたのですが……昔から時折、妙に頑固になることがある人でして。ある意味、従兄より厄介です」

普段は心から尊敬できる人格者なのですが、と付け足しながら、亘理さんはため息をついた。

——なんていうか、お金持ちも大変だなあ……

他人事ひとことのようにそう考えていると亘理さんが背筋を伸ばして、改まった様子で再び口を開いた。

「私は財産を独り占めしたいわけでも、金が欲しいわけでもないんです。ただ祖父が所有する別宅を守りたい。それが一番の理由です」

「別宅……ですか」

「はい。祖父が以前住んでいた家です。子どもの頃から慣れ親しんだ場所ですし、趣おもむきのある庭も気に入っている。今でもたまに仕事が休みの日にふらつと行つて、縁側でお茶やコーヒーを飲んだりするのが好きなんです。ただ、従兄は私と違ってあの場所に思い入れがないようで、真つ先に売却するつもりらしく、それをどうしても阻止したいんです」

「なるほど、そういうことでしたか……」

蓋を開けたら、わりと納得できる内容だった。

でも、まだ肝心な話を聞けていない。

「どうして結婚を申し込まれたのかはわかりました。でも、その相手がなぜ知り合つたばかりの私なんですか？ 亘理さんなら他にいくらでも適任な女性がいると思うんですけど……。ほら、社内にも

も女性社員がたくさんいらっしゃるでしょうし」

率直に一番の疑問をぶつけてみた。

亘理さんほどのイケメンなら、彼と結婚したい女性なんていくらでもいるはず。同じ会社に勤務する社員だけでなく、学生時代の同級生や友人の知り合いとか、その気になれば候補者なんて容易に見つかるはずだ。

しかし私のこの疑問に対し、亘理さんは下を向き、額を手で押さえた。

「それに関しても理由があるんです」

「はい、どんな？」

「……先に言っておきますが、引かないでくださいね」

引くとは？ と思わず首を傾げる。

「はい」

「実は私、社長令息という境遇もあつてか、社内の女性から好意を寄せられることが多くて」

「……はあ、それはまあ、わかります。だつて亘理さん、お顔もかっこいいですし。モテそうですよね」

私は正直に思っていることを口にしたただけなのだが、さすがに亘理さんは顔かない。

——そりゃそうだよな。肯定しにくいよね。

「恐縮です。で、数年前のことなのですが、私の知らないところで私を巡り女性社員二人が口論になった、なんてことがあります。それ以来、社内の女性とは親しくならないようにしているんで

す。もちろんこれまでどなたかと交際したり、親密になったことはありません」

「はあ……と重苦しいため息をつく巨理さんを見て、不憫に思った。モテる、つていいことばっかりじゃないのね。」

「交際経験がないわけではないかもしれませんが、学生時代も似たようなことがあったせいで、あまり女性の友人は多くないんです。わずかばかりいる友人にも、今更こんなことで連絡は取りにくい。そこで知り合ったばかりではありますが、会社の繋がりもなく年齢も近くて、今現在恋人がいらっしゃらない阿木さんにお願ひできれば……と思っただけです」

「なんでしよう、納得できるような、できないような理由ですね……」

「いかがでしょう」

すっかり目を見て言われた。

巨理さんは端正なルックスのイケメンで、これまでこっそり目の保養にしていたくらいには好みの容姿をしている。それに、いつも物腰柔らかいところも素敵だと思う。

ただ、こんな大事なことをサラッと頼んでくる辺り、少し、いやかなり変わっている。結婚を相続のための義務くらいにしか思っていないことがよく伝わってくる。

「えっと……い、いかがでしょうと言われましても……」

腰が引ける私に、巨理さんの目がキラリと光る。

「もちろんタダでは言いません。報酬も考えています」

「報酬……？」

これに反応し、彼を見つめる。

「結婚となると戸籍も変更しなくてはなりませんし、阿木さんの人生に多大な影響を及ぼします。ですからそれ相応のなにかを、あなたが望むものを差し上げます」

「え、ええええ……？ 望むものって……そんなの思い浮かびません」

「マンションでも、土地でもなんでも。結婚さえしていただければ、あなたの希望するものを差し上げます」

思わず「は？」と目を見開いた。

「マ、マンション……？ 土地……？ ええ……急に言われてもピンとこないです」  
混乱する私に、巨理さんが腕を組む。

「でしたら、阿木さんの結婚相手に求める条件を教えてくださいませんか？ できるかぎりご希望にお応えしますので」

言われてみて初めて、私が結婚相手に望むことってなんだろう？ と考える。

「条件と言われても普通だと思えますよ。ちゃんとお仕事してて、尊敬できて、私を好きでいてくれるとかそんな当たり前の……あっ!!」

今、自分の身に起こっているあることを思い出し、つい声が大きくなった。

——元カレのこと忘れてた!!

急に声を上げた私に、巨理さんが怪訝な顔で前のめりになる。

胸がドキドキしてきて、私はそれを誤魔化すようにビールジョッキを掴み、ごくごくと呼った。「なにかあるんですか?」

「……っ、条件っていうんじゃないんですけど、今ちよつと困っていることがあって……その……実は元カレに復縁を迫られてるんです」

「ほう」

巨理さんが背中を伸ばし、ビールジョッキを掴む。

「その元カレは付き合ってるときからモラハラ気味で、それが原因で別れたんです。でも、二年経った今になって、向こうからやり直したいと連絡が来るようになって」

私の話を聞きながらビールを飲んでいた巨理さんが、ずつと手をつけていなかったモツ煮込みをレンジですくい、取り皿に移し始めた。

「どうぞ。モツ煮込み美味しいですよ。そうでしたか、そんなことが」

「あ、ありがとうございます……。はい。私には復縁する気がまったくないので、困ってるんです」

彼からモツの入った小皿を受け取る。

「だったら尚更いい話だと思いませんか? 私と結婚するので、復縁はありえないと元カレに伝えればいい」

「……確かに」

巨理さんの言葉に、心の中で首がもげそうなほど頷いてしまった。

——あのモラ男も、さすがに誰かの妻になった私には迫らないだろう……多分。それに、これを機に引越してしまえば、押しかけてこられる心配もなくなる……

昨日のことがあって、ちよつど引越しを考え始めたタイミングで結婚話が舞い込んできた。これでもしや、神の思召しめぞろいでは? とすら思えてくる。

元カレ対策として、巨理さんとの結婚はこの上なく効果的ではないだろうか。

「……っ、あの……確認なんですけど、本当に私でいいんですか? いくら急いでいるとはいえ、好きでもない女との結婚を、やっぱりしなきゃよかつたって後悔する可能性もあるんですよ」

ビールジョッキの持ち手をグツと握りしめながら、私はおそろおそろ巨理さんに尋ねた。

これに対し、モツ煮を口に運びながら彼はクスツと笑った。

「先のことはわかりませんが、少なくとも今、まったく迷いはありません。それに、この話を阿木さんにお願ひしたのは、私があなただに好感を抱いているからです」

好感? とビールを呷ろうとしていた手が止まった。

「好感って、どんなところに……」

「実は、この蕎麦屋であなたを見かけるたびにいいなと思っていたんです。気取ることなく美味しそうに蕎麦を食べる姿や、店員さんに笑顔でご馳走様でしたと伝える姿を」

「……それだけ? それだけで結婚相手を決めちゃうんですか!」

嘘でしょ!? という気持ちを込めて聞き返すと、巨理さんがなにかを企たくらむかのようにニヤリとした。

「第一印象って大事だと思いませんか？ それに、一緒に食事をしたときの感覚も大事だと思ってるんです。今も一緒に食事をしていますけど、私はまったく違和感なく、美味しく食事ができている。それに、話していて楽しい。これだけでもあなたを選ぶ意味は大いにありと確信しています」

「食事……」

モツ煮を口に運んで咀嚼する。

いい感じに味が染みているモツ煮の美味しさに普段なら頬が落ちそうになるところだけど、今はそれどころではない……はずなのに。

——ちゃんと美味しい……

私も同じだと思つてると、考えていることを見透かされたのか、亘理さんがとろけるような笑みを浮かべた。

目の前で微笑む美男子に小さく胸がときめく。

亘理さんが言うところの判断基準だと、少なくともこの人と一緒にいて嫌な感じはしない。ご飯も美味しいし、気持ちが悪くならないとか生理的に無理という感覚もない。

確かに話は急だけど、べつに今好きな人もいない。年齢も適齢期で結婚を躊躇う理由はない。

なにより、結婚すれば鬱陶しい元カレとの縁も切れるし、亘理さんも大切なものを守る。

私が承諾さえしてしまえば、どちらにとってもいい話なのは間違いない。

これは渡りに船かもしれない。

ふわっと両親の顔が頭に浮かんで、少しだけ胸にもやっとしたものが生まれた。でも、悪いこと

をしているわけじゃないからと自分に言い聞かせ、少しずつ気持ちが固まっていく。

箸を置いて、膝の上に手を乗せた。覚悟を決めて、亘理さんと目を合わせる。

「っ……わ、かりました……。亘理さんと結婚します……。！ もちろん、あくまで契約上の、ですけど」

決断した私に、わかりやすく亘理さんの表情が明るくなった。

「ありがとうございます！」

「……この後の流れとかいろいろ教えてくださいね。あと、連絡先の交換もお願いします……」

傍から見ると、まるでこれから結婚する二人とは思えないくらい、私たちは事務的にお互いの連絡先を交換し、今後のことを淡々と語り合ったのだった。

——色っぽさ皆無だけど……私たち、ちゃんと夫婦になれるのかな？

なんだかともないことになってしまった。

「はあ……」

仕事中でも、このところの私はどこか上の空。

頭の中は今週末やらなければいけないこといっぱいになっている。

まず、引っ越しの準備。

亘理さんによると、結婚の準備を進めていることをお祖父様に証明しないとイケないらしく、手っ取り早く一緒に住むことを提案された。

それに関しては私もアパートから引っ越したかったので、二つ返事で承諾した。

だけど、ハツとする。彼は大企業の御曹司で一人っ子。もしや亘理さんのご実家で同居なのは？ と青ざめていると、そうではないと教えられた。

『一人暮らしなので親との同居ではないです。もちろんこの先も同居の必要はないです』

『あ、そうなんですね……』

わかりやすくホツとした。てっきり大きな家でご家族と住んでいるとばかり思い込んでいた。

『母が広い家は手入れが大変だからと嫌がつて、昔住んでいた家は売り、マンション住まいなんです。』

す。ですので、私も家を売るタイミングで自分のマンションを買ったんです』

一応ファミリー向け物件で、広さも部屋数もあるそうだ。だから阿木さんは一部屋を自由に使ってくださいと言われた。

——それを聞いて、早急に今の部屋を出る踏ん切りがついたよね……

管理会社に相談したら月末までに出てくれればいいとのことで、週末を利用して引っ越しをすることになった。

業者さんに頼むことも考えたけど、白物家電を処分してしまえばさほど荷物も多くない。亘理さんが車を出してくれるというので、荷運びをお願いすることにした。

そんなわけで私のアパートの部屋は、段ボールと細々としたものを突っ込んだ紙袋だらけである。引っ越し作業のことが頭を占めがちだけど、元カレ対策も忘れてはいない。

数日前、懲りない元カレから近いうちに会えないか、とメッセージが送られてきた。これ幸いとばかりに、早速【私結婚するので、もうあなたとは会いません】ときっぱり伝えると、秒で既読がついてメッセージが返ってきた。

【は!? お前ふざけてんの!? なんて俺がいるのに他の男と結婚するんだよ!!】

という理解不能な文章が送られてきたので、【意味がわかりません】とだけ返しておいた。

——とりあえず結婚することは伝えた。相手がこれによってどういう行動に出るかだなあ……

普通は結婚すると言われたら諦めるはず。あの男もそうであってほしいけど、復縁を断り続けているのにまったく意に介さないと見ると、これであっさり引き下がるとは思えない。

元カレのことはまだ不安ではある。でも、まずは目の前にあることから片付けたい。巨理さんともその辺の意見は一致したこともあり、早速私は今週末引越すことになったのだ。

「本当にあつという間なんですけど……」

土曜日の昼過ぎ。巨理さんが私のアパートに来てくれ、事前に用意しておいた荷物をテキパキと車に運んでくれた。

「これで今日運ぶものは全部？」

「はい。でも、まさか巨理さんがこんな大きな車で来てくれるとは思わなかったです」

引越作業ということもあり、私は上下グレーのジャージ姿。巨理さんもスポーツブランドの黒いジャージで、示し合わせたわけでもないのに似たような格好だった。

そんな巨理さんが乗ってきた車は、白い大型のワンボックスカー。かなり荷物が入るので業者さんに処分をお願いしている家電以外の荷物がすべて収まってしまった。

「知人に借りたんですよ。私が普段乗っている車では、運び終えるまでに何度か往復しなければいけないので」

そうなるとガソリン代もかかるし、この方が効率的だ。

車のリアゲートを閉めた巨理さんが、私のほうへ向き直る。

「私のマンションに移動しましょう。阿木さん、助手席に乗ってください」

「あ、はい……。では、よろしくお願いたします……」

緊張しながら、おずおずと少し高さのある助手席に乗り込んだ。

——ああ、私のアパート……。短い間だったけど、お世話になりました……と言ってもまだ家電の処分や掃除で戻ってくるけど。

巨理さんは運転もお上手で、大きなワンボックスを慣れた様子で操っている。でも私は、なるべく彼のほうを見ないように意識していた。

というのも、巨理さんとの同居生活が始まるせいなのか、昨晚とんでもなく色っぽい夢を見てしまったから。

まだキスはおろか手だつて繋いだこともないのに、夢の中の私と巨理さんはやけに仲睦まじかった。

夢の中で、私は彼に腕を絡めて歩いていた。そして場面は変わりとおある部屋の中へ。

『俺の純奈』

『俺の!?』

リアルでは絶対に言わなそうな台詞に赤面していると、ベッドへ押し倒されキスをされた。

『ん……っ、あの、……わた、りさんっ……』

『倫証って呼べよ』

やけに雄っぽく豹変した巨理さんに迫られて、私はものすごく戸惑っていた。けれど、夢は続いていく。

『絢奈、待てない』

『えっ……あ！ や、待って……』

待ってと言う私の言葉など一切聞かず、巨理さんが私のスカートを捲り上げ、シヨーツの中に手を差し込んだ。

嘘でしょと驚きつつも、私のそこはすっかり潤うるっていて、彼の指が動くたびに淫らな音を奏で始めた。

『もうこんなになってる。本当は絢奈だっけこうしてほしかったんだろ？』

『そっ……、そんなことない、です……』

本当にそんなことないのかな。もしかしたら、心のどこかで彼とこういうことをするのを望んでいたんじゃないの……？

頭の片隅で自問自答しているうちに、彼がシヨーツを脚から引き抜いた。

『わた……倫桎さん、もしかして私たち、するの……？』

『するよ』

迷いが一切ない彼の様子に、ゴクンと喉を鳴らす。

覚悟を決めると、ベルトを外しスラックスを脱いだ彼の股間に、昂きまりつった屹立きまりつが現れた。

あれが今から自分の中に入ってくる。そう思ったら、緊張は頂点に達した。

『あっ……あの、私……呼吸がうまくできな……』

ドキドキして彼を直視できなくて、わざと目を逸らしていると、秘部に屹立きまりつが宛がわれたのがわ

かって息を呑む。

『あ……』

くる。

意を決して目を瞑ったそのとき、目覚ましのアラームが鳴り、夢から覚めてしまった。

物語で言うところの最高潮で現実引き戻された私の目覚めの第一声は「嘘でしょ!」だった。

「あそこまでいったなら最後まで見せてくれればよかったのに……!!」

いやべつに巨理さんとしたかったわけじゃないけど。欲求不満でも多分ないけど。夢に怒りをぶつけてもどうしようもないのはわかっているけど、言わずにはいられなかった。

もちろん絶対彼には話さない。当たり前である。

悶々としながら巨理さんの運転する車に揺られ、アパートを後にした。

——なんか、巨理さんに申し訳ないわ……。契約結婚なのに夢の中であんなことをさせてしまつて……すみません……

「結婚のことは誰かに話しました？」

心の中で赤面していたら巨理さんに尋ねられて、あ……と数日前のことを思い出す。

「はい、仲のいい友人には……。もちろん、本当のことは伏せましたよ。知り合ったばかりだけど意気投合して、そういう流れになりましたって」

「お友達はなんて？」

巨理さんの声が若干弾んでいる。

「最初はめちゃくちゃ驚かれました……。でも、友達には元カレのことを相談していたので、むしろ祝福されました。これでもう安心だねって」

騙すのはすごく心苦しいけれど、私と亘理さんの関係が契約上のものであるとどこから漏れるかわからない。だから友人といえど事実は話せなかった。

それは亘理さんともあらかじめ話し合ってた決めたことで、彼の友人や秘書などにも同じような説明をすることになっている。

「まあ、そうですね。突然結婚を決めるなんて、どんなきっかけがあったんだと言われますよね」

ハンドルを滑らかに操りながら、彼が淡々と言った。

「亘理さんも周囲の方に驚かれました？」

「はい、とても。とくに秘書は最初嘘だと思ったみたいです。信じようとしませんでした」

「そうなんですか？」

クスツとしながら運転席を見る。

「ええ。でも本当だと根気よく伝えたところ、やっと信じてくれました。そのうち会わせますよ。頼りになるヤツなんです」

「はい。楽しみにしてます」

——亘理さんが頼りにしている人か……すごく仕事ができる人なんだろうな——  
そもそも亘理さんの職場がもうすごい。

その分野の業種では国内トップクラスの大企業で、コンビニでもスーパーでも必ず亘理さんの会社の飲料が置いてあるほどだ。

ネットで調べると、今では国内だけでなく欧米にも飲料を輸出しており、販路を拡大中。売上高をみるとんでもない金額だった。

そんな会社の重役と結婚することになるなんて、今でも信じられないけど。

——蕎麦食べてて知り合った、とか話したところで誰も信じないよね、こんな話……

心の中で苦笑していると、亘理さんが住むマンションが見えてきた。

事前にマンションの名前と場所だけは教えてもらっていたので、こっそり地図アプリで確認してみたら、ため息が出るような物件だった。

「亘理さん、このマンションを新築で購入したって言ってましたっけ……」

実際に建物を眺めながら、ぼつりと呟く。

「はい。会社に近くて通勤が楽だなと思ったので。でもローンを組みましたよ」

さすがにキャッシュで購入したわけではなかったらしい。でも、こんな部屋を買いえること自体がもう、私からするとすごい。

マンションは十三階建て。敷地内に数棟あり、平置きと立体の駐車場がある。亘理さんは平置き

の駐車場に車を止め、そこからは荷物を持って部屋を往復しなくてはならない。  
あらかじめ車の中に用意してあった台車に載せられるだけの荷物を載せ、亘理さんが部屋に向かう。私も紙袋や大きいバッグを肩にかけ、彼のあとを付いていく。

「すごく大きなマンションですね……。こんな都会にこんな広い敷地があったんですね」  
 「以前はこの辺りにとある企業の工場があったんですよ。そこを取り壊して、このマンションと隣のマンションが建ったんです」

なるほど、と思いながら中庭らしき芝生の広場を眺める。今日は天気もいいし休日ということで、芝生の上にレジャーシートを敷いて、走り回る子どもたちを眺めている若い夫婦がいる。

——のどかでいいところだな……。亘理さんもうこういうところが気に入ってこのマンションを買ったのかな？

ぼんやり思いつつ、彼に続いてマンションの中へ入る。

エレベーターで十二階まで移動し、彼の部屋へ。

「どうぞ」

ドアを開けてくれた亘理さんが、先に部屋へ入れと促してうながくる。では、と中へ足を踏み入れると、私が住んでいたアパートとは比べものにならない広さの玄関と、奥の部屋がすぐには見えない長い廊下があった。

——うわ、広っ。わかつてはいたけど、やっぱり広い……

入つてすぐに経済格差を感じるが、今はそれどころではない。後ろでは亘理さんが台車に載せた荷物を下ろし始めているので、私もそれを手伝う。

「阿木さんの部屋はそちらです。そこそこ広さもあるので、荷物は全部入ると思いますが、もし入りきらなかったらもう一部屋使ってくださいでもかまいません」

「大丈夫ですよ。一部屋使わせていただけるだけでじゅうぶんです」

入らなきや処分すればいいだけのこと。こんな立派なお部屋に住まわせてもらえるだけで、私としてはありがたいのだから。

——なんせ、家賃負担はゼロでいいって言われているし。もちろん結婚するという大事な役目？はあるんだけど、その間の生活が保障されているのは、本当にありがたいことよね……

しみじみしているうちに、亘理さんは台車を持って車に戻っていった。その間に、私は宛がわれた部屋へ行き、荷物を片付けることにした。

がらんとした、八畳ほどの部屋はクローゼットつき。角部屋なので窓もあるし、部屋も綺麗だ。「掃除……しておいてくれたのかな。いいお部屋だなあ……」

クローゼットもともと住んでいたアパートより広くて収納力抜群。ハンガーも用意されていて、持ってきた服は問題なく全部収まった。

本を収納する棚を分解して持ってきたので、それはあとで組み立てればいい。バッグ、アクセサリなど細かいものを片付け終えたところで、いつの間にか亘理さんが戻ってきていた。彼は段ボールに入った食器などをキッチンに運んでくれた。

「亘理さんありがとうございます、片付け、私やります」

部屋の片付けを終えてからキッチンに移動する。広々としたリビングの一面にある対面キッチン、白を基調としていてものすごく清潔感がある。

「もしかして亘理さんって、お料理とかはあまりしない方ですか？」

ジャージ姿の巨理さんは、持ってきた段ボールのテープを剥がしてくれている。

「最低限ですが、やらないわけではないです。だから調理器具はそれなりに揃ってますよ」

確かにパンを焼くためのオーブントースターだったり、コーヒーマーカーだったり、家電はある。引き出しの中にはトングや箸も用意されている。

「とはいえ、あまりこだわりはないんです。ですから、キッチンが阿木さんが好きなように使ってください」

いいのかな、と思いつつも彼の厚意に甘えることに。でも、それよりも、私たちにはやるべきことがある。

「あのですね巨理さん。私たち交際ほぼゼロ日婚をするくらい愛し合ってる設定なんですから、お互いに敬語はまずい気がするんですよ。もうちよつと親密さをアピールするためにも、フランクに接しませんか」

キッチンの片付けをする前に、ずっと気になっていたことを提案してみた。

おそらくこの先、巨理さんのご両親やお祖父様に会うことになるはず。そのとき、よそよそしい態度で接していると、本当に愛し合っているのか疑われるかもしれない。

なので、親しい間柄のように振る舞う練習をしておく必要がある。

これに巨理さんもなるほど、と吹き頷く。

「確かに。では……絢奈さん？ いや、絢奈って呼び捨てにしたほうがいいですか？」

申し訳なさそうにしている巨理さんに、ぐつ、と親指を立てた。

「いいです！ どうぞ遠慮せずに呼び捨てでどうぞ。私はさん付けで呼んだ方がそれっぽいんで、そうさせてもらいます。しゃべり方は……家ではなるべくタメ口の方がいいと思います」

「……絢奈、飯食う？ とか？」

ぎこちなくそう言った巨理さんの不安を払拭するように、こつくりと頷く。

「そうです。そんな感じがいいと思います。私が年下ということもありますし、外では夫を立てる妻、みたいなスタンスでいこうと思ってます」

「……昭和的な？ 古くない？」

「でも巨理さんのお祖父様くらいの世代って、そういう感じの方が好きじゃないですか？ 会ったときに好感が得られないのはまずいかなあと……」

好感ね、と巨理さんが髪を掻き上げる。

整髪料でセットしていない彼の黒髪はさらさらで、下を向くたびに前髪が目にかかる。

——しかし……綺麗な顔だな……。こんな人と一つ屋根の下で生活とか、大丈夫かな……そんなことを考えながら彼を見つめていたら、パチッと目が合った。

「別に、祖父の好感を得ようとしなくてもいいんじゃない？」

「……そうですか？ でも、孫の嫁にふさわしくないと思われるのはどうかと……」

「それよりも、俺が君にベタ惚れだつてところを見せつけてやれば、祖父もあっさり納得すると思っ」

「……え。……べ、ベタ惚れ……？」